ネパール首都近郊農村部における
成人・高齢者の口腔保健状態および食行動

ふかい　かくひろ
○ 深井穫博、矢野裕子、蒲池世史郎、松岡奈保子
（ネパール歯科医療協力会）

【背景】咀嚼機能の低下は、食行動に影響を及ぼす。この咀嚼機能の低下の主な原因は、歯の喪失と歯痛である。また歯数と義歯の有無は、生命予後に影響を及ぼすことが先進工業国におけるコホート調査で報告されている。しかしながら開発途上国における高齢者の歯の保存状態と食行動に関する報告は極めて少ない。

【目的】歯科医療提供体制が十分とはいえない開発途上国における成人期以降の地域住民の口腔保健状態と食行動の実態とその関連を検討することが本研究の目的である。

【方法】対象地域は、ネパール首都近郊の農村地域である。対象者は、21歳から82歳の地域住民280名（男性113名、女性167名）である。調査方法は、歯科医師による口腔内診査と質問紙を用いたインタビューである。分析項目は、現在歯数および食品別摂取頻度と主観的咀嚼状態である。食品は、豆スープ、ライス、ジャガイモ、そばがき、チャパティ、トウモロコシ、干飯、いり豆、アヒル、ニワトリ、ヤギ、水牛の9品目である。

【結果および考察】年齢階級・性別一人平均現在歯数は、20-29 歳 29.2（男性 29.3、女性 29.1）、30-39 歳 29.9（29.5、30.2）、40-49 歳 29.0（28.9、29.1）、50-59 歳 27.3（28.8、25.9）、60-69 歳 21.1（20.4、21.7）、70 歳以上 20.9（19.9、21.4）であった。摂取している食品内容は、年齢階級別、性別にはいずれも顕著な特徴はみられなかった。9 品目中、対象者の半数以上が毎日 1 回以上摂取しているのは、豆スープ、ライス、ジャガイモであった。肉類では、週数回以上摂取している者が半数以上を占めたのは水牛のみであった。食品別の咀嚼状況では、「よく噛めない」と訴える者の割合は、男女いずれも年齢が上がるにつれて増加している傾向がみられた。ライスでは、40 歳以降に「よく噛めない」者がみられ、その割合は、40-49 歳で男性 4.8%、女性 5.6%であり、70 歳以上ではそれぞれ 10.0%、26.1%を占めた。また水牛では、30 歳以降からみられ、30-39 歳では男性 6.3%、女性 36.0%であったのに対し、70 歳以上では、70.0%、60.8%であった。

【結論】本調査結果では、対象地域住民の摂取する食品の種類は、年齢別、性別に顕著な特徴はみられなかった。高齢者においては、20 歳台に比べて 70 歳以降では約 10 歯の喪失がみられた。「よく噛めない」と訴える者の割合は年齢が上がるにつれて男女いずれも増加し、特に水牛では、70 歳以降で 60%以上を占めた。以上の結果から、本対象地域における成人期以降の口腔内状態が、食品摂取状況に影響すると考えられた。